



歌語「真木柱」の変遷：『源氏物語』における機能

| | |
|-----|---|
| 著者 | 岩坪 健 |
| 雑誌名 | 同志社国文学 |
| 号 | 78 |
| ページ | 28-39 |
| 発行年 | 2013-03-20 |
| 権利 | 同志社大学国文学会 |
| URL | http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013341 |

歌語「真木柱」の変遷

——『源氏物語』における機能——

はじめに

『源氏物語』の伝本は中世以来、青表紙本と河内本に大別され、それら以外を別本と総称している。別本の中には独自の本文を含む写本があり、本稿では陽明文庫本の桐壺の巻を取りあげる。その巻は伝後深草院筆・鎌倉中期写で、他の伝本には見られない歌ことば「真木柱」^①があり、その解釈を手掛かりとして『源氏物語』における歌語の機能を解明する。また『源氏物語』以前および以後の用例も調べて、その語句の時代による変遷も探究したい。

一 桐壺の巻の例

問題の箇所は、亡き桐壺の更衣を帝が偲んでいる場面である。まず、伝明融筆臨模本を底本にした新編日本古典文学全集（小学館）

の本文を掲げる。^②

岩 坪 健

このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。（傍線、筆者）
（桐壺の巻、三三三頁）

この一節は他の伝本により校訂されていない。また、『源氏物語大成 校異篇』（一六頁6～8行め）の底本（伝二条為明筆の池田本）とも一致する。しかしながら傍線を付けた部分「まくらごと」に注目して、『源氏物語大成 校異篇』の校異に採られた諸本を見ると、青表紙本と河内本には異同はないが、別本のうち陽明文庫本が「まきはしらに」、国冬本が「まくらと」になっている。『源氏物語別本集成』（正・続）を見ても異文があるのは、この二本のみである。「枕言」の意味は口癖の言葉、日常の話題であり、それで問題

の一節を解釈すると、帝は「長恨歌」のような題材を明け暮れの話題にされている、となる。国冬本の「まくらと」が「まくらことは」の脱落でなければ、「まくら」には枕言のように常に身近に置いて離さないもの、あるいは歌枕のように物事の拠り所、典拠という意味があるので、「長恨歌」のようなものを、いつも取りあげる、話題の典拠にする、とひとまず通釈できる。

問題は、陽明文庫本の「まきはしら」（真木柱）である。その言葉を辞書で調べても、「ただその筋をぞ真木柱にせさせたまふ」を解釈できる語意は掲載されていない。最古の例は『万葉集』で四例ある。それを置いて整理すると、次のようになる。

A、真木（杉や檜など良質の木材になる木）で作られた立派な木。

例「（上略）長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食す国を

治めたまへば（下略）」卷六・九二八

「真木柱 作る杵人 いささめに 仮廬のためと 作り

けめやも」卷七・一三五五

「真木柱 ほめて造れる 殿のごと いませ母刀自 面

変はりせず」卷二十・四三四二

B、枕詞。真木柱は太い柱であるところから、「太し」にかか

る。

二九

例「真木柱 太き心は ありしかど この我が心 鎮めか
ねつも」同・卷二・一九〇

『万葉集』卷二十の「まけばしら」（麻気婆之良）は防人歌で、それは「まきはしら」の東国方言である。

ほかに『源氏物語』以前の用例を『新編国歌大観』CD-ROM版
Vol.2（角川書店、二〇〇三年六月）で検索しても、次の一首しか
見当たらない。

まきはしらつくるそまいいさくめのかりほのためとおもひけん
やは（古今和歌六帖』第二・そま・一〇一七）

この歌は本文は少し違うが、『万葉集』卷七の歌（前掲）によると
考えられる。次に古い例は『源氏物語』の「真木の柱」で、そのあ
とは『狭衣物語』まで見出せない。

散文の用例は和歌よりも少なく『源氏物語』が最古になり、次い
で『狭衣物語』『浜松中納言物語』および『栄花物語』の長元十年
（一〇三七）の記事と続く。結局、『源氏物語』以前の例は『万葉
集』と『古今和歌六帖』しかなく、それに用いられた意味では桐壺
の巻の一節を解釈することはできない。

二 『源氏物語』の用例

「真木柱」の例が『万葉集』に四首あるとはいえ、平安時代にな

ると万葉仮名で書かれた『万葉集』は解説しにくくなり、『古今和歌六帖』に再録された一首以外は、王朝人には馴染みがなかったであろう。その一首は「そま入」または「いささめ」^③の例歌として、中世の歌学書『綺語抄』『和歌童蒙抄』『和歌色葉』『顯注密勘抄』などに多く引用されている。

それに対して『源氏物語』では前掲の桐壺の巻のほか、「真木柱」が八例、「真木の柱」が二例もあり、その十例はどの伝本にも見られる。まず「真木の柱」の二例は同じ場面に使われている。それは姫君が母君に連れられて家を出る際、お気に入り柱を詠んだ和歌を紙に書きとめ、それを柱の割れ目に入れた箇所である。母君が返した歌にも、「真木柱」が詠みこまれている。

常に寄りゐたまふ東一面の柱を人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、檜皮色の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割れたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな
えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」として、

馴れきとは思ひいづとも何により立ちとまるべき真木の柱
ぞ（真木柱の巻、三三七頁）

姫君の歌を父（鬚黒大将）が見て恋しがっている場面にも、「真木柱」は使われている。

かの真木柱を見たまふに、手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに（真木柱、三七八頁）

この姫君の通称は真木柱であるが、それは後世の呼称ではない。まず、前掲の場面より四年後には「かの真木柱の姫君」（若菜下、一五九頁）と呼ばれ、光源氏亡き後も「真木柱離れがたくしたまひし君」（紅梅、三九頁）、「真木柱のひとつ腹」^④（竹河、六三頁）、「真木柱の姫君」（竹河、八九頁）と続く。この姫君が物語に登場するのは、真木柱の巻から竹河の巻までであり、つねに真木柱と関連づけられている。

よって『源氏物語』における「真木柱」八例と「真木の柱」二例のうち、七例はこの姫君に関わり、その七例の語意はすべて辞書に記された、立派な柱であるので、桐壺の巻の用法とは無関係である。そこで残りの三例（次の①～③）を検証する。

①（源氏が）出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを（紫の上が）見たまふにも胸のみふたがりて（須磨、一九〇頁）

②（薫が）寄りゐたまへりつる真木柱も褥も、なごり匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。（東屋、一五四頁）

③（匂宮は薫を）うらやましくも心にくも思さるるものから、

真木柱はあはれなり。これ(薰)に向かひたらむ(浮舟の)さまも思しやるに、形見ぞかしとうちまもりたまふ。(蜻蛉、二一九頁)

右記の三例のうち①と②は柱と訳せるが③は異なり、新編全集の頭注には、

浮舟が向きあつていた相手としての薰を、真木柱と見立てた表現。「源氏釈」は「我妹子が来ても寄り立つ真木柱そもむつまじやゆかりと思へば」(出典未詳)を掲げる。

とあり、「真木柱はあはれなり」の一節を「この大将を女君のゆかりの真木柱と思うと、しみじみ懐かしいお気持ちになられる」と訳している。

頭注に引かれた『源氏釈』とは、十二世紀中頃に活躍した世尊寺伊行が編纂した注釈書で、それに採られた引歌は次のように解釈できさる。

妻(または恋人の女性)が来ては寄り添い立っていた柱にも、心引かれるなあ。彼女のゆかりと思うと。

柱までが愛しい人に関わるものと思うと慕われる、と詠んでいる。すなわち「真木柱」は「ゆかり」の象徴とされている。それを前掲の例文③に当てはめると、匂宮は亡き浮舟と関わりがある人として薰を「真木柱」と見なしたのである。

『源氏釈』は例文②にも同じ引歌を挙げている。その文章の直前を見ると、浮舟の母が薰を垣間見て感動し、娘の相手に薰をと願っている。それに続く一節に使われた「真木柱」は、薰を娘の「ゆかり」にと望む親心を表すと解せる。『源氏釈』は例文①には注を付けていないが、十三世紀中頃に成立した『異本紫明抄』には西円の説として、この引歌が引かれている。それに従えば、須磨へ退去した光源氏の「ゆかり」として、紫の上は「真木柱」を見たことになる。①も②も慕わしい人の「ゆかり」として、その人が「寄りゐた」「真木柱」が取りあげられたのは、この古歌によると考えられる。すると問題の桐壺の巻の例も、同様に解せる。亡き桐壺更衣を偲ぶ帝は「長恨歌」のような題材を、更衣の「ゆかり」とされたのである。この例と例文③の「真木柱」は、通行の辞書に掲載されている語意では解釈できない。

三 『源氏物語』以後の物語

現在の辞典には採られていない「ゆかり」という意味は、鎌倉前期に順徳院が編纂した歌学書『八雲御抄』巻第三の居処部で示されている。

柱 宮(神殿又諸宮)。まろ。まさき。まさき柱はたゞ、「の」柱也。又物のゆかりなどを、まさばしらと「は」いふ也。(『日本

歌学大系」別巻3、三〇六頁。「」内の本文は他本により補足)

それでは「物のゆかり」という意味で使われた用例が『源氏物語』以外にもあるかという点、管見では一例しか見出せない。それは十一世紀後半に成立した『狭衣物語』で、主人公の狭衣が常盤の里に赴き、飛鳥井の女君が亡くなったことを知る場面である。

(女君が煙となつて)立ち昇りけんむなしき空は、恨めしさも悲しさもさまざまに、なかなかなる心地すべければ、(女君が

入水した)跡の白波をだにゆかしがりたまひしかば、まいて真

木柱の数にもいかでかと思すなるべし。(巻三、五四頁)

文中の「真木柱」に関して新編全集の頭注には、

飛鳥井の女君の居所の表象。「真木柱」は、檜や杉など「真木」を材とした柱で、「常盤(木)」の縁の詞。「数」を「よすが」とする本が多い。

と指摘して、『源氏釈』の引歌「我妹子が来ても寄り立つ真木柱そもむつまじやゆかりと思へば」を挙げ、その一節を、

まして女君が住んでおられた家もどうかして確かめておきた
いとお思ひになつたに違ひない。

と訳している。確かにこの「真木柱」は、柱と訳しただけでは文章は通じない。

『狭衣物語』には「真木柱」の用例があつたと三例あり、すべて同じ場面に使われている。それは狭衣が飛鳥井の女君の遺詠を見つけた箇所、その歌は柱に直に書かれていた。『源氏物語』では歌をたためた紙を柱のひび割れに差し入れたので、その点は異なるが、恋慕う人が書き残した和歌を「真木柱」に見つける、という設定は共通している。

(女君が)常にみたまひける所の柱に、物の書かれたりける。

(二首、省略)

心地苦しう思されける折の手まさぐりにや、臥しながら書きけり
りと見えて、下の方に、はかばかしうも見えぬさまにて、

なほ頼む常盤の森の真木柱忘れな果てそ朽ちはしぬとも

(女君の歌)

とあるにも、夢の面影(狭衣の夢に現れた女君の亡霊)さへ添ひたる心地して、さらにえぞ思し醒まさざりける。

寄り居けん跡も悲しき真木柱涙浮き木になりぞしぬべき

(狭衣の歌)

とて、とみにえ立ち退きたまはぬに、殿より人々参らせたまへり。(中略)今日さへ暮したまふべきならねば、出でたまふに

も、真木柱は返り見がちに思されけり。(巻三、一四三頁)

狭衣が「真木柱」を「返り見がちに思され」たのは、「飛鳥井の女

君の詠歌が三首書き付けられ、彼女の思いがこもっている柱。」(新編全集の頭注) だからである。このように「真木柱」が選ばれたのは、『源氏物語』では鬚黒大将の姫君が「常に寄りゐたまふ東面の柱」、『狭衣物語』では飛鳥井の女君が「常にゐたまひける所の柱」だからである。

次の例も、前年に亡くなった藤原威子が生前に親しんでいた柱であり、それを娘の章子内親王が見て偲ぶ場面である。

(章子内親王の東宮参りがなかつたならば) まことに慰む方なからまじと、うはべは世に従へど、藤壺(章子内親王の住居)にては、(威子が) おはしまし御有様より、ゐさせたまひし真木柱などを見るは、忍びがたくあはれる心の中なり。(『栄花物語』巻三十四、暮まつほし、二九七頁)

この状況は『源氏物語』で、紫の上が「源氏の」出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも胸のみふたがり」と光源氏を恋慕う設定(前節の例①)に似ている。

『浜松中納言物語』にも一例あり、吉野で母尼の四十九日を済ませた姫君を迎えに中納言が来訪して、姫君が吉野を立ち去る個所である。

住み馴れたまふ真木柱をさへ、心よりほかに立ち離れ、われにもあらず誘はれ給ふ年ごろの御ありさま、目の前のおもかげに

見えつつ、かきくらし御車に乗りやり給はず。(巻四、三三二頁)

新編全集の頭注に、「真木は特に檜を指し、真木の柱は家にあつて心強い愛着のある存在。」として、真木柱の巻の影響を指摘するように、「真木柱」は離れがたい家の象徴とされている。文中の「住み馴れたまふ真木柱」は、姫君がいつも寄りかかっていた柱と解釈すると、他の物語にさらに似通う。

鎌倉時代に成立した物語においても、「真木柱」の用法は継承されている。『石清水物語』では、女君がそばの柱に書き付けた和歌と、それを見た男君の返歌にそれぞれ「真木柱」が詠みこまれている。『いはでしのぶ』では、亡き人がいつも寄り掛かっていた柱を見て、「真木柱」の歌が詠まれている。^⑤

四 中世の和歌

『新編国歌大観』CD-ROM版 ver. 2で検索すると、物語中の和歌は前掲の例以外には見当たらない。そこで他の歌を歌人ごとに活躍した順に整理すると、以下の通りになる。なお、一人で二首以上詠んだ場合のみ歌数を洋数字で示した。たとえば鎌倉時代の家長と基家は一首ずつ、雅有は三首ある。ただし、同じ歌が複数の作品に採られていても一首と計算して、異なり数を示した。

平安後期 匡房 親房 清輔

鎌倉時代 家長 基家 雅有3 家長 知家 政範2 後宇多

院 高峰顕日

室町時代 耕雲 師兼 為尹 正徹2 雅親 基綱 実隆4

まず平安後期の三首は、すべて恋歌である。成立順に挙げると、

一首めは大江匡房（一一一一年没）、二首めは源親房（十二世紀中頃に活躍）、三首めは藤原清輔（生没一一〇四〜七七年）が詠じた。

源親房の歌は『新統古今和歌集』（巻十九、雑下）と『題林愚抄』

（巻二十五、誹諧歌）にも採られている。

○『江帥集』二九三、「女にかはりて」

わぎもこがすむてふやどの真木柱ひとまもあらばあふよしもが
な

○『統詞花集』（藤原清輔撰。一一六五年頃成立）巻二十、戯咲、

九六七、「題しらす」

しるらめやあはでひさしの榎柱ひとまひとまにおもひたつとは

○『藤原清輔集』二七三、「寄源氏恋」

あふことはかたびさしなるまき柱ふす夜もしらぬ恋もするかな

清輔の歌は詞書に「寄源氏恋」とあるが、真木柱の巻における「真木柱」は親子の情に関わるものであるので、その内容を踏まえたというよりは、真木柱という巻名を用いて恋歌を作成したと見られる。

「真木柱」が恋歌になるのは、「我妹子が来ても寄り立つ真木柱」歌が影響しているのかもしれない。

この傾向は鎌倉時代にも継承され、全十一首中、恋歌が四首で最も多く、次いで寺院の柱が三首、須磨の閑屋の柱が二首、『源氏物語』関連も二首に分けられる。辞書には「真木柱」は宮殿や大邸宅の柱と説明されていて、それは『万葉集』や寺院の柱には当てはまるが、中世の和歌では須磨の閑屋や東屋、常盤の里の柱も「真木柱」と表現されていて、必ずしも都の御殿とは限らない。すでに『狭衣物語』に「常盤の森の真木柱」と詠まれているし、『浜松中納言物語』の例も吉野であった（第三節、参照）。『源氏物語』でも最後の例（匂宮が薫を「真木柱」に見立てたもの）は、宇治で浮舟が向き合っていた薫を指すと見ると、これだけが当物語においても洛外の例になる^⑦。

室町時代になると恋歌が増え、全十一首中、部立か歌題が恋であるものが六首も占め、題は「柱」であるが内容が恋歌であるものも一首ある。その他は『源氏物語』関連が二首、歌題が「暁眠覚」『暁眠易覚』のものが一首ずつ（二首とも正徹）である。実隆は四首詠んでいるが、そのうちの一首は『源氏物語』巻名歌、他の三首はすべて恋歌である。このように平安後期からは、「真木柱」といえば恋愛に関わるイメージが強くなる。これは『源氏物語』でも、

真木柱の君に関しては親子の情にまつわるものであったが、それ以外では光源氏ゆかりの柱として紫の上が見ていたように男女間に用いられ、『狭衣物語』以後の物語でも異性を偲ぶ形見のものとして「真木柱」が機能していたからであろう。ところが江戸時代になると、詠まれ方に大きな変化が見られる。

五 近世の和歌

江戸時代の和歌の用例を歌人が活躍した順に分けると、以下の通りになる。なお、一人で二首以上詠んだ場合のみ歌数を洋数字で示した。ただし、同じ歌が複数の作品に採られていても一首と計算して、異なり数を示した。また便宜上、『八十浦之玉』所収歌は詠者ごとに分けていない。

長嘯子 貞徳 後水尾院 霊元院 真淵 2 筑波子 宣長 2
千蔭 2 秋成 評平 2 曙覧 『八十浦之玉』 8 (うち一首は
真淵歌と重複)

順に見ていくと、長嘯子の和歌には詞書も歌題もない。

よりるけん楨の柱はそれながら人はまたとはみえぬやどかな
〔挙白集〕二〇四一)

これは『源氏物語』真木柱の巻の内容を踏まえている、と解釈すると、従来の歌い方を踏襲している。

次の貞徳の歌題は「蔦」である。

つたかづらはふきあまたのから錦まきはしらのたつた山かは
〔逍遊集〕秋歌、一七〇四)

このような叙景歌は今までに例がなく、近世においても珍しい。その類例としては、『新明題和歌集』卷三・秋部・居待月に採られた次の二首が挙げられる。

より居つる待つよひ更けぬ月に憂き雲も嵐の楨のはしらに(二二〇六、霊元院)

よりゐても月をこそまて心あての峰にむかへる楨の柱に(二二〇七、後水尾院)

次いで真淵以後の十八首で、伝統的な詠み方は次の二首しかない。
○『筑波子家集』(筑波子は真淵の門人)

いへこぼちてあらたにつくりかふるに、としごろのなごり
のみかは昔の事のいよよ遠くさへなりもてゆく心ちして

いへはみなあらずなりてもなき人のおも影のみぞ立ちかへるべき(二二二)

なれにけるまきはしらしのこりせばわするなとだにかきつけ
てまし(二二二)

当歌は『源氏物語』真木柱の巻を踏まえ、住み慣れた家を立ち去った姫君に我が身を重ねて詠んでいる。

○『柿園詠草』（加納諸平の家集）

顕恋

かきくらす闇のまぎれに出でこしをうたても騒ぐむら烏かな
 (五〇二)

榎ばしらたつなもしらでわがやどを見きとや人のひとに告げけ
 ん (五〇三)

近世の例では唯一の恋歌である。しかしながら、「榎ばしらたつな」(真木柱が立つように立つ名)のように、「真木柱」が掛詞「立つ」を導く詠み方は中世には見当たらない。近世になって貞徳の「まきのほしらのたつた山かは」(前掲)や、真淵の次の歌、

いでるをいにしへさまにつくりけるに、九月二十六日人人
 つどひてほぎ歌よみけるによめる宝暦五年の秋なり

飛騨たくみほめてつくれる真木柱たてし心はうごかざらまし
 (『賀茂翁家集』巻二、賀、三六七)

において、「真木柱」が「立つ」を導く枕詞のような働きをするようになる。けれども貞徳も真淵も「真木柱」本来の意味(立派な木という意)を用いているのに対して、諸平の歌はそうではない。諸平のもう一首(『柿園詠草』一〇七六)も「今のをつづに 真木柱たてし功は」で、柱の意味はない。

「真木柱」は『万葉集』でも枕詞として使われていたが、それは

「太し」に掛かるものであった(第一節、参照)。中古・中世では枕詞の用例はなく、近世になって復活するのは、国学者により万葉研究が盛んになったからであろう。真淵以後の「真木柱」歌で、前掲の筑波子と諸平以外は、すべて万葉調である。とりわけ防人歌「真木柱 ほめて造れる 殿のごと いませ母刀目 面変はりせず」の影響は大きく、前出した真淵の歌も、また次の真淵歌(『賀茂翁家集』巻一、秋、一八六)、も、防人歌の初句・二句を用いている。

新むろにて

真木柱ほめてつくれる高きやに千秋の月を見そめつるかな

真淵の歌は二首とも、新居を寿いだものである。宣長以後も「新室」や京都・鎌倉の御殿を祝っている。また真淵・本居大平と門人たちの和歌を集めた『八十浦之玉』の七首のうち、防人歌の「真木柱 ほめて造れる」をそのまま利用したのが二首、『万葉集』の「真木柱 太き心」を用いたのが一首ある。そのほかにも神社や御殿などの柱を美称したものがばかりで、実見して詠んだ歌が多い。『八十浦之玉』所収の「真木柱」歌には、恋歌も『源氏物語』を踏まえた歌もなく、万葉調で統一されている。

六 歌語「真木柱」の変遷

今までに考察したことを踏まえて、改めて上代から近世に至る

「真木柱」の用法の変遷を概観し、『源氏物語』の用例の位置づけを確認したい。

まず上代では『万葉集』に四例あり、そのうち三首は宮殿や大邸宅に使われる立派で太い柱を意味する。残る一例は「太し」に掛かる枕詞である。

平安時代になると、万葉歌が一首だけ『古今和歌六帖』に採られる。それ以外で『源氏物語』以前の歌は、「我妹子が来ても寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」しか見出せない。その歌は出典未詳であるが、『源氏物語』以前にあったと推定される。というのは、当歌を引用した『源氏釈』も、またそれを孫引きした藤原定家『源氏物語奥入』も、当歌を古歌と認めているからである。^⑤

また紫式部の頃には「我妹子」歌により、「真木柱」が「ゆかり」の象徴とされていたからこそ、真木柱の巻において姫君ゆかりの品として真木柱が取りあげられたのではなからうか。

そこで改めて『源氏物語』における「真木柱」の用例を、巻の順に見ていく。まず最初に須磨の巻で、光源氏が「寄りゐたまひし真木柱」を紫の上が見て惚んでいる。引歌では女性が「寄り立つ真木柱」を男性が懐かしむので、当巻では男女が逆になっている。次に真木柱の巻では、鬚黒の姫君と北の方が「真木の柱」を用いた歌を詠み交しているので、この時点では「真木柱」が母・娘のどちらを

指すかは分からない。後に鬚黒が「かの真木柱を見たまふに、手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに」と惚んだことにより、「真木柱」は姫君と結びつく。その後は「真木柱の姫君」などと呼ばれ、「真木柱のひとつ腹」（竹河の巻）では「真木柱」だけでその姫君を示すに至り、その巻を最後に登場しなくなる。

宇治十帖では、「薫が」寄りゐたまへりつる真木柱」を、薫を娘婿にと願う母が見ている。これは「真木柱」を光源氏の形見と紫の上が見た状況に似ている。そして最終例の「（匂宮は薫を）うらやましくも心にくくも思さるるものから、真木柱はあはれなり。」に至り、初めて「真木柱」を柱と訳せなくなる。このように通観すると、「真木柱」が「ゆかり」の象徴であることを、鬚黒の姫君などで繰り返し用いた後、最後に柱と切り離れた「真木柱」を持ち出す、という作者の用意周到な配慮が窺えよう。

この観点に立って、陽明文庫本にのみ見られる桐壺の巻の用例「ただその筋をぞ真木柱にせさせたまふ」を見直すと、これも「真木柱はあはれなり」と同じく、柱とは訳せない。鎌倉前期に成立した『八雲御抄』には「物のゆかりなどを、まきばしらといふ也」とあるので、陽明文庫本が書写された鎌倉中期には「真木柱」が「ゆかり」を意味することが知られていたであろう。それゆえ「ただその筋をぞ真木柱にせさせたまふ」という当本の本文でも解釈で

きたから、そのまま今日に伝わったと推測される。

とはいえ、「真木柱はあはれなり」の類例は、『狭衣物語』に一例（「真木柱の数」または「真木柱のよすが」）あるだけで、『源氏物語』以後の物語は真木柱の巻の内容を踏まえている。また中世の和歌にも、柱と訳せない例はなく、恋歌に多く用いられている。具体的に詠まれた柱は、寺院や東屋、須磨の関屋や常盤の里である。仏閣の場合は『万葉集』で美称された御殿に似るが、それ以外は中世の用法である。とりわけ須磨の関屋は実景とはいえ、朽ちた柱である。

近世になると、『万葉集』を研究した国学者により、「真木柱」の詠み方も上代に戻る。寺院や朽ちた柱はなくなり、新居や御殿、都を寿ぐ歌に用いられる。また中古・中世では使われなかった枕詞も復活する。ただし『万葉集』では「太し」（形容詞）に掛かるが、近世では「太しく」（動詞）や「立つ」（動詞）にも掛かる。また恋歌は、中古・中世では最も多く詠まれていたが、近世になると激減する。

終わりに

『源氏物語』の巻名に歌ことばが使われている場合、その歌語の持つイメージが利用されている。たとえば帚木は、遠くからは見えないが近づくと消える木であり、それは光源氏に言い寄られると逃げ

てしまう女性の比喩に相応しい。また、蟬の抜け殻を意味する空蟬は、衣を残して逃げ去った女性を象徴している。『源氏物語』を初めて読む人も、帚木や空蟬という巻名から、近寄つても会えない仲を連想したのである。すなわち巻名に用いられた歌語から、物語の内容が連想できたのである。

では、真木柱の巻はいかがであろうか。その巻名を見た王朝人は古歌「我妹子が来ても寄り立つ真木柱そもむつましやゆかりと思へば」を思い出し、「ゆかり」の人を「むつまし」と思う、というようになことが描かれていると想像したかもしれない。夕顔の忘れ形見である玉鬘は、「夕顔の露の御ゆかり」（玉鬘、一二〇頁）と呼ばれていた。ということは、夕顔の「ゆかり」である玉鬘を「むつまし」と思うのは、夕顔と交際していた光源氏である。しかも光源氏は玉鬘の養父でありながら、すでに思いを打ち明けている。この二人の仲はどうなるのか、と当巻を読む前から読者は心躍らせていたであろう。ところが巻頭を見ると、その予想は裏切られ、すでに玉鬘は鬚黒と結婚している。巻名に使われた歌語のイメージは、見事に外されたのである。このように現代では失われた読み方を、王朝人は楽しんでいたかもしれない。

注

① 当写本は、陽明叢書（思文閣出版、昭和五四年）に収められている。

本稿で問題にする「真木柱」は、一六丁裏の二行めにある。

② 他の作品も断らない限り、新編日本古典文学全集（略称「新編全集」）の本文による。

③ 『新編国歌大観』所収の『古今和歌六帖』の本文では第三句が「いさくめ」であるが、中世の歌学書では「いさ、め」である場合が多い。

④ 鬚黒大将には前妻にも後妻（玉鬘）にも子女がいるので、真木柱の姫君と同腹か異腹か区別するため、「真木柱のひとつ腹」（真木柱の君と同腹という意味）と表現したのであろう。

⑤ 岩原真代氏は、柱に書きつける行為と柱に物を入れる行為では意味が違々と説かれた。

柱に書きつける行為が、親しんだ土地や邸宅への執心を断ち、新地に赴くための心準備の行為となっている。（中略）土地を離れるとき書き付けられる和歌には、メデア性とともに、居住者が馴れ親しんだ場所への愛執を断つ意味がある。しかし、柱に物を入れる行為はむしろ、その地への深い執着と自己の存在を刻みつける行為であった。（「真木柱」によせる和歌——柱歌の系譜と住環境から——、「日本文学」平成一八年九月）

⑥ 『石清水物語』の和歌は以下の通り（『鎌倉時代物語集成』第二巻、七〇頁）。

としをへて住こし宿のまきはしらよりたつ人も今はあらじな
よりあける人のかた見と思ふにもそもむつまじきまきはしらかな
『いではしのぶ』の一節は、以下の通り（前掲書、三三〇頁）
「つねによりい給いし、もやのなかばしらのもにて、とばかりため
らわせ給ふ。

歌語「真木柱」の変遷

まきはしらよりいし人のおもかげのさらずはながきかた見ならまし」

⑦ 『太平記』巻十八では、『源氏物語』橋姫の巻の一場面を描いた絵に關する箇所「真木柱」が見られる。それは八の宮の宇治の邸宅で、洛外である。（二宮御息所の事、四五二頁）

⑧ 近世の歌で「真木柱」を「あづまや」に用いた例が一首ある（『うけらが花』初編巻二、夏歌、三七九）。近世では珍しいが、中世では用例があり、伝統的な詠み方と言えよう。

⑨ たとえば『源氏物語奥人』は、十世紀後半に活躍した惠慶法師の歌に對して、「此歌非其時古歌、不可為証歌」（桐壺の巻）と批評して、引歌と認めていない。また『源氏積』でも、「又天人夢の中に琵琶をおしふる事、ねさめといふ物かたりにあり。されどもそれ源氏よりさきの事とはみえず」（宿木の巻）として、当物語を『源氏物語』以後の例と指摘している。

⑩ 若菜の巻に關して、玉上琢弥氏は次のように述べられた（『源氏物語評釈』第七巻、二〇頁、角川書店、昭和四一年）。

読者は、「藤裏葉」の巻で、光る源氏の栄花の至福を見た。そして、次に、この「若菜上」の巻名を見たとき、光る源氏の不老を思い、その祈りの「若菜」が繰り返して供せられるであろうことを思う。「藤裏葉」の巻で、来年は四十の御賀とあつた。その盛儀を「上」と「下」とに繰り返して見ることを期待する。

しかし、本文を読みはじめると、その期待は一応沈静する。暗い出だしなのだ。